



埼玉県のマスコット コハトン

Lib. Letter

2012 Winter [11～2月]季刊

平成24年12月10日 通巻 第30号

編集・発行 埼玉県立熊谷図書館

<https://www.lib.pref.saitama.jp/> Tel 048-523-6291

新島襄とその妻八重

来年、平成25年のNHK大河ドラマは、福島県会津若松出身の新島八重が主人公です。新島八重は京都にある同志社大学を創立した新島襄の妻となった女性ですが、旧姓を山本八重と言い、会津戊辰戦争では女ながら銃をもって参戦、後に「幕末のジャンヌ・ダルク」「会津の巴御前」と言われたほどの人物です。

今まであまり知られていなかった八重ですが、その生涯は大変波乱に満ちたものでした。八重に大きな影響を与えた2人の人物、兄山本覚馬、夫新島襄、そして八重を育てた会津の気風や戊辰戦争にも触れながら、その生涯を辿ることにします。



「福島民友」2011年11月25日(金)より

1 八重の前半生（生誕～会津戊辰戦争まで）

◆会津藩士の娘に生まれて

八重は会津藩の砲術師範を代々務める山本家の三女として、1845年（弘化2年）11月3日に生まれました。八重の両親は、父権八（良高）・母佐久、父は山本家に婿養子として入り、権八を襲名しています。八重には、17歳上の兄覚馬（良晴）と2歳下の弟三郎がいました。

八重の幼少期の記録はあまり残っていませんが、同じ藩士の娘日向ユキの回想の中に、「針と一緒に習った。」という記述が残っています。

ただ、上士である砲術師範の家に生まれていることから、兄覚馬、弟三郎とともに、「什（じゅう）の掟」など会津の気風を叩き込まれていたと思われます。

コラム 什（じゅう）の掟

会津藩では、同じ町に住む六歳から九歳までの藩士の子供たちが、十人前後で集まりをつくっていました。この集まりのことを「什」と呼び、そのうちの年長者が一人什長（座長）となり、毎日順番に、什の仲間のいずれかの家に集まり、什長が「掟」をひとつひとつ申し聞かせたあとで、昨日から今日にかけてこの掟に背いた者がいなかったかどうかの反省会を行いました。そして、背いた者がいれば、什長はその者を部屋の真ん中に呼び出し、事実の有無を「審問」しました。事実間違いがなければ、年長者の間でどのような制裁を加えるかを相談し、子供らしい「しっぺ」「手あぶり」などの制裁を加えました

- 一、年長者の言ふことに背いてはなりません
- 一、年長者にはお辞儀をしなければなりません
- 一、嘘言を言ふことはなりません
- 一、卑怯な振舞をしてはなりません
- 一、弱い者をいぢめてはなりません
- 一、戸外で物を食べてはなりません
- 一、戸外で婦人と言葉を交へてはなりません
- ならぬことはならぬものです。

※什により、一つ二つ違うところもありましたが（「戸外で婦人と言葉を交えてはなりません」はすべての什にあったわけではないようです）、終わりの「ならぬことはならぬものです」は、どの什も共通でした。

掲載にあたっては、日新館ホームページ（<http://www.nisshinkan.jp/about/juu>）を参考にしました。

◆会津戊辰戦争、八重の戦い

1868年（慶応4年）1月3日、八重24歳の時、薩摩藩、長州藩などからなる新政府軍対旧幕府軍の戦い、戊辰戦争が起こりました。始めの戦いは、鳥羽・伏見の戦いで、八重の第三郎はこの戦で負傷し、その後江戸の会津藩中屋敷で亡くなりました。戦いはその後、転々とし、やがて福島会津へと戦いの舞台は移ります。

同年8月23日、新政府軍は会津城下に攻め込みますが、この時、八重は第三郎の形見の装束を着て、大小の刀を差し、元込七連発のスペンサー銃を持って、鶴ヶ城に入城します。この籠城戦中、八重は城主松平容保に四斤山砲の不発弾を分解し、構造を説明したという記録が残っています。籠城戦が続く9月17日、八重の父、権八が城南の一ノ堰の戦いで戦死します。その数日後の9月22日、会津藩は降伏し、その夜、八重は三の丸の白壁に「明日の夜は何国（いづく）の誰かながむらん なれし御城に残す月かげ」と和歌を刻みました。この話は、東海散士（柴四朗）の政治小説『佳人之奇遇』巻2（会津城中烈婦和歌ヲ遺スノ因）で紹介されています。（『政治小説集 二（新日本古典文学大系明治編17）』（岩波書店 2006）【県立久喜図書館所蔵918.6/37】）

コラム 会津の女性たち

戊辰戦争時、他の藩に比べて会津藩では女性の死亡数が多かったと言われています。

主な理由として考えられるのは、城内に男性だけでなく多数の女性が籠っていたため、城内への攻撃により亡くなった者が多かったこと（城主容保の義姉照姫自ら鶴ヶ城に籠城していたので、照姫に従い城に残った者が多くいました）、また、女性ながら八重のように戦いに参戦し、命を落とした者がいたことが考えられます。

戦いで亡くなった女性の中では、「武士の 猛き心にくらぶれば 数には入らぬ 我が身ながらも」との辞世の句を遺した中野竹子がよく知られています。

2 八重の後半生（新島襄との結婚～襄没後）

◆襄との出会い

八重は、鳥羽・伏見の戦い後、消息不明となった覚馬が京都にいるとわかり、母たちとともに京都に上京します。目が不自由になってしまった兄覚馬を助けながら、京都女紅場（のちの京都府立第一高等女学校）で働き始めます。その頃、八重はその仲間たちと宣教師ゴルドン夫妻のもとで聖書を学んでいましたが、ゴルドンと襄は知り合いだったので、ゴルドンの紹介で二人は顔を合わせたのが最初の出会いです。

のちに、八重は襄との出会いや襄とのエピソードを語っていますが、当時の襄は結婚について聞かれると、「日本人と結婚したいが、亭主が東を向けと命令すれば、三年でも東を向いている東洋風の婦人はご免です。」という考えの持ち主でした。

これを聞いた京都府知事の榎村正直が八重を勧めたということがあったようですが、この時は具体的に進展しませんでした。（『新島八重子回想録』大空社）

襄が八重を意識したのは、1875年（明治8年）8月に襄が同志社英学校（のちの同志社大学）設立のため協力者となった兄覚馬を訪れた際、八重が井戸の上に板戸を渡して、そこに正座して裁縫しているという当時の女性としては非常に大胆な姿を目撃してからでした。

襄は非常に筆まめな人で、多くの手紙を残していますが、知り合いに出した手紙の中で結婚する前の八重をこう評しています。

彼女は決して美人ではありません。しかし、私が彼女について知っているのは、美しい行いをする人（ハンサム・ウーマン）だということです。私にはそれで十分です。

1875年（明治8年）11月23日ハーディー宛の手紙
（『新島八重 愛と闘いの生涯』吉海直人著 角川学芸出版 2012）

◆襄との結婚

襄と八重は、1875年（明治8年）10月に婚約しますが、婚約後、襄の英学校設立に反対する運動があり、そのことから八重は勤めていた女紅場を解雇される、ということがありましたが、翌年1月、襄と八重はキリスト教式結婚をします。

結婚してからの八重は、洋装と和装をミックスした格好をしたり、夫の襄のことを「ジョー」と呼び、襄よりも先に馬車に乗りこむなどの言動から、世間から「悪妻」と言われました。が、夫婦仲は大変よく、襄がたびたび八重に送った手紙には八重を気遣う優しい夫だった襄の姿を見ることができます。

また、八重は襄の思想に深い理解を示し、公私にわたり様々な協力をしています。襄が同志社英学校設立後、1876年（明治9年）の春、八重もまた宣教師たちとともに女子向けの私塾を開きますが、これはのちの同志社女子大学となります。

このように、八重は女子教育に力を入れる一方、同志社英学校が抱える様々な問題に苦慮する襄を助け続けます。しかし、八重は英学校の学生たちとあまりうまくいきませんでした。西洋式の風習を取り入れた襄たちのスタイルはなかなかその当時の考え方と相いれず、その批判は八重に向けられたこと、かつ八重自身がかかなり強情な性格だったことにもその要因となりました。

襄は英学校を大学の形にするため、様々な苦労を重ねますが、1890年（明治23年）1月23日、襄は病気のため46歳で亡くなってしまいます。襄の念願だった同志社大学となったのは襄死後からしばらくたったのちの1920年（大正9年）のことでした。

◆襄亡き後の八重

八重は襄の死後、生前からの軋轢から同志社と疎遠になっていきます。八重は女紅場時代からの縁で、裏千家円能斎直門の茶道家として茶道教授の資格を取得し、茶名「新島宗竹」を授かり、以後は京都に女性向けの茶道教室を開いて生活していくこととなります。

さらに日清戦争、日露戦争で篤志看護婦となり、その功績により1928年（昭和3年）昭和天皇の即位大礼の際に銀杯を下賜されています。八重はその4年後の1932年（昭和7年）6月14日、寺町丸太町上ルの自邸（現・新島旧邸）にて86歳で亡くなりました。

襄の死後、八重は茶道で身をたて、さらに看護婦となり、自立した生き方をして亡くなりました。

まさに、今に通じる「ハンサム・ウーマン」ではないでしょうか。



3 八重を巡る人々

八重の人生に大きな影響を与えた二人の人物を紹介します。

◆兄・山本覚馬

覚馬は1828年（文政11年）1月11日、山本権八の長男として生まれました。砲術を幼少期から学ぶとともに、蘭学を学び、のちに会津藩校である日新館の教授を務めました。

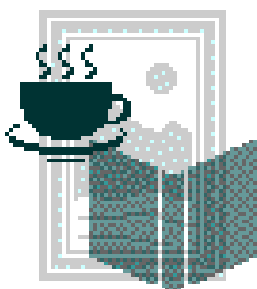
1862年（文久2年）に幕府の命により、京都守護職に就いた藩主松平容保に従って京都に赴き、御所の守護にあたりつつ、その一方で洋学所を設け、他藩の藩士も自由に学べる場を作りました。しかし、1868年（慶応4年）1月に、「朝敵」の一人として薩摩藩に幽閉されてしまいます。幽閉後も、すでに眼病を患っていたため口述筆記で政治、経済、教育等論じた建白書「管見」を作成、薩摩藩の上層部が一目置くほどのすぐれた内容のものでした。

1869年（明治2年）に幽閉が解かれて、翌明治3年京都府庁に出仕、知事榎村正直の顧問として京都の近代化に大きな役割を果たします。

1875年（明治8年）の春、新島襄と知り合ったとされ、襄は覚馬に「基督教の学校を設立したい。」と話したことから、覚馬は襄の協力者となります。覚馬は維新後に購入していた旧薩摩藩邸の敷地を学校用地として襄に提供、襄との連名で「私学開業願」を文部省に出願し、認可を受けました。これが後の「同志社大学」となります。「同志社」という名前は覚馬によるものでした。

その後、1879年（明治12年）、最初の府会議員の一人に選出され、初代議長になりましたが、翌年議長、議員を辞職します。辞職後は、同志社を軸に活動していましたが、1885年（明治18年）、京都商工会議所会長に就任しています。1890年（明治23年）襄が他界後、覚馬は同志社臨時総長に就任しています。

覚馬はその2年後、1892年（明治25年）64歳で亡くなりました。



◆夫・新島襄

1843年(天保14年)安中藩士新島民治の長男として、安中藩江戸屋敷で生まれました。1864年(元治元年)、21歳の時、密航して渡米、8年間ボストンで教育を受けました。フィリップス・アカデミー(高校)在学中に洗礼をうけてクリスチャンになり、さらにアーモスト・カレッジを卒業後、アンドーヴァー神学校で神学を学んでいます。

神学校在学中には岩倉遣欧使節団に随行し、アメリカと欧州8カ国の教育制度の調査や視察を行います。この使節団での欧州訪問を通じて、「日本にキリスト教信仰に基づく教育機関を作りたい。」という意思を強めていったと考えられます。帰国直前の1874年(明治7年)、バーモント州ラットランド市グレイス教会で開催された、アメリカンボード第65回年会で、「日本にキリスト教主義の学校を作りたい。」と訴え、総額5000ドルの寄付金をえたほどです。

同年、10年にわたる海外での生活を終え、帰国します。学校設立に動き始める中で、山本覚馬を紹介され、彼の協力を得て、1875年11月29日(明治8年)に同志社英学校を開校します。その中、覚馬の妹八重と知り合い、結婚をします。以後、伝道と大学設立運動に奔走、46歳で亡くなりました。

より詳しく知りたい方へ

～県立図書館にある今回の展示資料～

※『書名』(著者名 発行者 出版年 所蔵館)【県立図書館の請求記号】

以下に掲載した資料は、県立熊谷図書館2階ロビーで2月21日まで展示中です。

◆ 新島八重関係資料

『新島八重 愛と闘いの生涯』(吉海直人著 角川学芸出版 2012)【289.1/ニイ011】

『新島八重の生涯』(吉村康著 歴史春秋社 2012)【BM289/ニイ】

『新島八重子回想録』(永沢嘉巳男編 大空社 1996)【289.1/N72】

『会津の群像』(小島一男著 歴史春秋社 1991)【281.2/ア】

『会津の史的な風景』(宮崎十三八著 歴史春秋社 1993)【212.6/ア】

新聞『福島民友』2011.11.25(金)複写物 *原本 県立熊谷図書館所蔵

雑誌「八重と新島襄」連載開始記念対談 ハンサム・ウーマンの内に潜む在野精神
(『サンデー毎日』2012年1月22号) 毎日新聞社 2012)

雑誌「異色佐幕派/女性 山本八重」(『歴史読本』1997年4月号) (新人物往来社 1997)

雑誌「小日向えりの会津に恋して 第一回新島八重」(『歴史読本』2012年6月)
新人物往来社 2012)

◆ 山本覚馬関係資料

『心眼の人山本覚馬』(吉村康著 恒文社 1986)【289.1/ヤ】

『山本覚馬 伝記・山本覚馬』(青山霞村著 大空社 1996)【289.1/Y31】

『山本覚馬伝』(青山霞村原著 京都ライトハウス 1976)【289.1/Y31】

『闇はわれを阻まず 山本覚馬伝』(鈴木由紀子著 小学館 1998)【289.1/ヤマ045】



◆ 会津戊辰戦争関係資料

- 『会津戊辰戦史（一）（二）続日本史籍協会叢書 復刻』（東京大学出版会 1978）【210.58/ヅ】
『会津戊辰戦争史料集』（宮崎十三八編 新人物往来社 1991）【R210.61/ア】
『会津落城悲史』（梁取三義著 国書刊行会 1975）【210.61/】
『荒川勝茂明治日誌』（星亮一編 新人物往来社 1992）【210.61/メ/】
『私たちの会津戦争』（星亮一著 平凡社 2006）【210.61/ホ】
『物語妻たちの会津戦争』（宮崎十三八編 新人物往来社 1991）【210.61/ツ】

◆ 新島襄関係資料

- 『新島襄 人と思想』（井上勝也著 晃洋書房 1990）【198.5/ニ】
『新島襄 自由への戦略』（吉田曠二著 新教出版社 1996）【198.3/Y86】
『新島襄』（渡辺実〔著〕吉川弘文館 1959）【289.1/ニ/】
『新島襄 その時代と生涯 新島襄生誕一五〇年記念』（同志社 1993）【198.3/D88】
『新島襄 近代日本の先覚者 新島襄生誕一五〇年記念論集』（晃洋書房 1993）【198.3/D88】
『新島襄』（根岸橘三郎著 警醒社書店 1923）【289.1/N73】
『新島襄 人と思想』（魚木忠一著 同志社大学出版部 1950）【198.58/ニイ】
『新島襄』（日本歴史学会編 吉川弘文館 1966）【289.1/ニ】
『新島襄 わが人生』（新島襄著 日本図書センター 2004）【289.1/ニイ002】
『新島襄 良心之全身ニ充滿シタル丈夫』（太田雄三著 ミネルヴァ書房 2005）【289.1/ニイ002】
『新島襄への旅』（河野仁昭著 京都新聞社 1993）【198.3/ニ/】
『新島襄書簡集』（同志社編 岩波書店 1954）【B198.5/ニ/】
『新島襄書簡集』（新島襄著 岩波書店 1954）【B289.1/ニ/】
『新島襄先生伝』（ゼー・デー・デビス著 大空社 1992）【198.3/D46】
『新島襄先生の生涯』（森中章光著 不二出版 2004）【198.3/モ】
『新島襄全集 1～9（上）（下）、10』（新島襄〔著〕同朋舎出版 1983～1996）【081.6/ニイ】
『新島襄全集を読む』（伊藤彌彦編 晃洋書房 2002）【289.1/ニイ002】
『新島襄伝』（湯浅与三著 改造社 1936）【289.1/ニイ002】
『新島襄と徳富蘇峰』（本井康博著 晃洋書房 2002）【289.1/ニイ】
『新島襄の交遊』（本井康博著 思文閣出版 2005）【289.1/ニイ002】
『新島襄の生涯』（J. D. デイヴィス著 小学館 1977）【198.5/デ】
『新島襄の生涯 増補改訂版』（神田哲雄著 社会教育者連盟 1956）【198.5/ニ】
『新島襄の世界』（北垣宗治編 晃洋書房 1990）【198.5/ニ/】
『新島襄の手紙』（新島襄〔著〕岩波書店 2005）【B289.1/ニイ002】
『わが生涯の新島襄』（吉田曠二著 不二出版 1991）【289.1/モ】

上記以外にも、県立図書館では人物、歴史について様々な資料を所蔵しております。

お探しの資料がありましたら、お気軽にお問い合わせください。

※ 刊行後2年を経過した雑誌は貸出しができません。
2012年現在、2009年以前の雑誌は貸出不可です。

